



宮崎県JICA派遣専門家連絡会

CONTENTS

宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長に任ぜられて
 宮崎県JICA派遣専門家連絡会結成の経緯など
 宮崎県JICA派遣専門家連絡会20年を振り返って
 「国際」「地域」を宮崎で！
 私の国際協力活動

山口 良二
 玉井 理
 永田 雅輝
 井上 果子
 矢野 靖典



宮崎県JICA派遣専門家 連絡会会長に任ぜられて

宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長
 宮崎大学農学部 山口 良二

宮崎県JICA派遣専門家連絡会の会員の皆様には益々、ご健勝でご活躍のことと思います。2016年は4月に、熊本での大地震もあり、糸魚川市での大火災もありました。暑すぎる夏で、海水温も上昇し、魚の回遊の変化や、高温で珊瑚が白化、また、台風の進路も北海道まで被害を受けるこれまでにない進路をするという現象がありました。2016末の選挙で多くの人の予想を覆してアメリカではトランプ大統領が誕生し、昨年から今年にかけて、日本の安倍晋三首相、ドイツのアンゲラ・メルケル首相を除いて世界のリーダーたちの交代の時期でもありました。世界では予想もしない出来事が次々とおこっています。アメリカは世界をリードしていくとの立場は普遍と思われましたが、温暖化ガスのパリ協定の離脱宣言、TPP離脱などアメリカでも世界の警察宣言をやめて自国第一主義でナショナリズム化の傾向にあります。幸いアメリカ市民にはまだ正義や自由な発現の機会が残っていて様々な意見が出されています。

このたび、本会長を拝命することになりました。奇しくも設立20周年となる年に会長になりました。

グローバル化、国際化と現在では当たり前のように叫ばれる時代になり、会長とは言っても特別なことできるわけではありません。国際化が特別なことではなく、会員の皆様に通常の事象の一環であるような活躍しやすい環境を整えていく必要があると思われます。

思えば1991年（平成3年）アフリカ、ザンビア大学獣医学部、1992年（平成4年）南米アルゼンチン、ラ・プラタ大学獣医学部、1993年（平成5年）タイ国国立家畜衛生試験場、2001年（平成13年）ヴェトナム、ヴェトナム国立獣医学研究所に計4回JICA専門家として派遣されました。それぞれの国で、若さゆえ活動的に活躍でき、多くのカウンターパートは良い働きをしてくれました。今思えば、いい経験でもあり、その時点で、自分のできることはやってきたと思いますし、その時のつながりは各方面でまだ生きています。専門家として派遣されるには背景がありました。日本は高度成長をしながら、お金は出すがヒトは出さない。という見えない批判がありました。日本人の研究者も多くは欧米をまだ向いていて私の周囲の、例えば宮崎大学の先生方も

欧米には行くが、東南アジアには興味がなさそうだったし、実際に渡航者は欧米ばかりでした。1990年（平成2年）代GDPは世界第二位でもまだ国として成熟しておらず（主観ですが）、全てに余裕がなかった時代であったと思います。アメリカでは日本製の車やラジカセなどを破壊するデモンストレーションなどがあって、日本も急成長により国際関係に過敏になっていました。今の若人には考えられないようなJAPAN as No1といわれはじめた時代でした。現在では、少し落ち着いて成熟さは出てきたものの今度は国の資金に余裕がない様に、または資金自体の使用する方向が変わってきたようにも思えます。国際化も十分とは言えませんが、宮崎の環境も進んではおり、大学や宮崎県、宮崎市などの県民、市民の努力もあり、宮崎大学を中心に多くの留学生を見かけるようになりました。

ただし、JICA専門家に関する状況を見ますと、JICA専門家として派遣の需要はあるものの、必要とされる人材の個々個人の多忙さもあり、供給不足で専門家派遣が少なくなっているのが現状です。最近では大学を含め派遣するための環境が整わなくなってきました。そのために、構成員には、若い人が増えていく状況が徐々に少なくなり、会員の高齢化が進んで、新入会員の増員について多くを見込めなくなってきたのがJICA専門家の現状です。

JICA専門家連絡会の活動と役割は、JICA国内機関や青年海外協力隊OB/OG会、各都道府県の国際交流協会などと連携して国際協力に関する理解と促進の活動、帰国専門家間の交流、地域のイベントやシンポジウムの共催、支援など行うことになっています。

宮崎大学の昨今の状況は吉成先生を准教授にお迎えした後、今度は鹿野先生を迎え積極的なJICAとの事業を実施しようと活動的になり、JICAとのつながりも強くなってきております。気になるのは、大学における専門家の活動は若い人たちとの交流が少ない気がします。例えば、学生は国際化に興味があり、専門家経験者とも話をしたいが、学生にはそのチャンスは少なく、専門家も個別に経験談を話すしかない状況で、一方では話を聞いたからと言って学生がすぐに専門家として派遣されるわけではあり

ません。宮崎県には青年海外協力隊OB/OG会や支援する会があります。がその存在も知らないヒトも多いようで、大学に職を持つものとしては学生が興味をもつ協力隊関係者との接点を作ることも重要ではないかと考えています。連絡会の目的にも交流の推進や支援があり、今後のJICA専門家連絡会としては、将来を担う若者への貢献を忘れてはならないと考えています。専門家会では勉強会（講演会）があり、協力隊では経験談を話す機会がありますが、海外の経験談を聞きたい若い人たちが、参加することは有意義であります。さらに、専門家も知らない国際の名の付くイベントが宮崎でもあり、交流していくことが重要であると考えています。同じ国際化ということ 키워ワードにこれから、他の団体とも協力してやっていく必要があると考えます。

ところで、専門家としてこれからも日本や宮崎のために有益な大きな出来事がありました。私のもとで大学院、博士を取得した学生が、大学学長になりました。その留学生はJICA専門家として派遣された時の出会いが、我が宮崎大学で勉強するきっかけとなりました。それは、ベトナムの旧ハノイ農業大学講師であったグエン・ティ・ラン氏で、帰国後、副学部長、講座主任、副学長、そして、今では若くして学長となりました。ラン氏は宮崎大学を誇りとして頑張っています。そのベトナム国立農業大学（新）ラン学長は昨年、宮崎大学ベトナム同窓会の会長となりました。今後の活躍を祈ります。

私の国際化のモットウは留学生を教育して帰国後大きく育ててもらって、ネットワークを作ることです。現在、タイ、チュラロンコン大学に数名、インドネシアボゴール農業大学に数名、ベトナムのベトナム国立農業大学に学長をはじめ数名、マレーシアのプトラ大学、ミャンマー獣医大学の現役留学生が当教室で学んでいます。それぞれの学生は宮崎大学を誇りにして、帰国して大学で教鞭を執っています。留学生を私物化するためでなく親日派、宮崎大好人間になってもらう様に、ここから国際化がはじめる様に心がけて頑張っているつもりでいます。青年海外協力隊出身の専門家もおられることですから、今後各団体との交流を行い活動していきたいと思えます。



宮崎県JICA派遣専門家連絡会 結成の経緯など

平成6年度～15年度 宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長
宮崎大学名誉教授 玉井 理

JICAは開発途上地域などの経済、社会の発展に寄与し、国際協力の促進を図るため、様々な分野の技術を有する専門家を海外に派遣してきました。これらの派遣専門家は帰国後も国際協力のよき理解者として国際協力、国際交流に貢献してきましたが、その活動は組織化されていないため、個人レベルにとどまっていた。JICAでは1991年より国内各地域毎に帰国専門家連絡会の結成を促し、帰国専門家のネットワークを通じて国際協力、国際交流をより一層推進する事業を始めました。1993年には北海道など10地域に専門家連絡会が結成され、1993年までに27地域に連絡会が結成されました。

1994年3月初めにJICA九州支部参事の和田氏が宮崎大学に来訪され、宮崎県内の帰国専門家連絡会結成について意見を求められました。宮崎大学農学部にも数人の帰国専門家教官が在籍していましたが、派遣先に関する情報交換は個人レベルにとどまっており、県内に在住する大学教官以外の帰国専門家についての情報もなく、交流の機会もありませんでした。和田氏からの提案は実に願ってもないこ

とで、学内の帰国専門家教官と協議した結果、直ちに連絡会結成に向けて取り組むことになりました。

帰国専門家リストを所有しているJICA九州支部にお願いして、県内在住の帰国専門家に連絡会結成の呼びかけをしていただき、3月22日に結成会を開催しました。結成会には帰国専門家13名とJICA関係者5名が出席し、宮崎県国際交流課、宮崎県国際交流会等からの来賓参加もいただき、宮崎県帰国専門家連絡会がスタートしました。

当面、連絡会では ①会員相互の連絡を密にし、交流を深める ②地域の国際交流活動への協力、参加を目標にかかげて活動を始めましたが、歴代の会長はじめ幹事の皆様のご尽力により、次第に国際支援、国際交流関連団体等との交流、連携も密になり、今年度の連絡会総会は青年海外協力隊OB会や青年海外協力隊を支援する会との合同開催が計画されていると聞き及んでいます。連絡会設立から20年余を経て、力強い活動をさらに広範囲に亘り展開されている連絡会の更なる発展を祈念申し上げます。



宮崎県JICA派遣専門家連絡会 20年を振り返って

平成16年度～25年度 宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長
宮崎大学名誉教授、前宮崎国際大学長 永田 雅輝

1. 宮崎県JICA派遣専門家連絡会の概要

(1) 設立

宮崎県JICA派遣専門家連絡会の設立は国際協力事業団九州支部の指導のもと、平成6年3月22日、県内在住の派遣専門家18名のうち13名の出席を得て結成会を発足させ、宮崎県における国際交流事業の

促進と充実、並びに国際交流活動の発展に資することを目的に「宮崎県JICA派遣専門家連絡会」の名称で発足しました。

(2) 会則

<趣旨概要> 国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の

第一線に身を置き共通の体験を有した我々は、持てる知識とエネルギー等を結集して、開発途上国に対する国際協力活動の拡充、宮崎県における国際交流活動の発展と活性化に貢献することを願って本会は結成されました。

＜事業概要＞ 本会は前項の趣旨の具現化を図るため、下記に係る事業が掲げられました。

- ①ODAの進展動向に関する調査研究および提言
- ②JICA及びJICA九州支部（現国際センター）の業務遂行の方途に関する助言、支援等
- ③宮崎県と諸外国（特に開発途上国）との国際交流活動の促進、充実に資する諸活動
- ④会員相互の情報交換、交流、親睦に関すること

（3）役員

発足から現在までの世話人は以下の通りです。

- 平成6年度～11年度
 会長：玉井 理（宮大農）
 幹事：足立泰二（宮大農）、山本正悟（宮崎県）、
 JICA九州支部長
- 平成12年度～15年度
 会長：玉井 理（宮大農）
 幹事：永田雅輝（宮大農）、山本正悟（宮崎県）、
 位田晴久（宮大農）
- 平成16年度～19年度
 会長：永田雅輝（宮大農）
 幹事：位田晴久（宮大農）、山本正悟（宮崎県）、
 大野和朗（宮大農）
- 平成20年度～24年度
 会長：永田雅輝（宮大名誉教授・みやざきTLO）
 幹事：位田晴久（宮大農）、山本正悟（宮崎県）、
 大野和朗（宮大農）、佐伯雄一（宮大農）、
 山口良二（宮大農、平成24年度から）
- 平成25年度～27年度
 会長：位田晴久（宮大農）
 幹事：山本正悟（宮崎県）、大野和朗（宮大農）、
 山口良二（宮大農）、野中成晃（宮大農）、
 佐伯雄一（宮大農）
- 平成28年度～
 会長：山口良二（宮大農）
 幹事：大野和朗（宮大農）、鹿野正雄（宮大国際）、
 野中成晃（宮大農）、佐伯雄一（宮大農）

（4）会員数

H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13
18	22	23	33	---	35	31	44
H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21
---	51	62	62	60	58	57	56
H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	
54	54	54	52	52	52	54	

上段：年度、下段：人数（名）、----：不明

2. 宮崎県JICA派遣専門家連絡会の主な活動

（1）総会

総会は年度終盤の2月、3月を目途に年1回開催してきました。総会には、JICA九州国際センター、宮崎県、国際交流団体等の関係者を来賓として招待しています。内容は、本会の活動報告や講演会（会員や会員外による現地活動報告等）、交流会等の行事を実施しています。これらの活動報告は、会報誌「JICAエキスパートみやざき」に掲載し会員へ情報提供をしています。

本会の運営はJICA九州国際センターの活動支援経費を活用しているために、会費徴収はしていません。しかし、総会後に行う懇親会、交流会、意見交換会の経費はその都度徴収しています。平成12年度からは宮崎大学に在籍する留学生にも参加を呼びかけて会員との交流を図っています。このことによって、会員にとっては活動した国の留学生が参加者の中にいると当時の活動の話題で盛り上がり、国際交流の活性化に繋がっています。総会には毎年30名前後の出席者があります。

平成29年度からは、青年海外協力隊OB／OG会と青年海外協力隊を支援する会の三者の合同総会（交流会）を開催することになっていますので、宮崎県内のJICA関係者が縦横の方向で絆を強くし、国際協力に貢献して行けることとなります。

（2）会誌「JICAエキスパートみやざき」の発刊

会報は平成9年度から編集を始めました。この活動は九州圏内では熊本県に次いで2番目に早い取り組みであったことから、JICA九州国際センター所長からはお褒めの言葉を頂きました。その理由は、連絡会の設立への取り組みは遅かったにも拘らず会誌発行への取り組みが早かったからです。会報は年1回発行し、会員、関係機関、他県連絡会等に配布してい

ます。会誌を通して情報提供を行うと共に国際協力活動の発展を狙うものでもあります。コンテンツを見ると本会の活動が垣間見られ、その時代の本会の動向が判ります。その一覧を下記に紹介します。

- **創刊号 (1998年2月)**
 会報の発刊に当たって
 玉井 理 (宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長)
 会報の発刊によせて
 表伸一郎 (国際協力事業団九州国際センター所長)
 会員の現地報告シリーズ1 ケニアの人と自然
 山下研介 (宮崎大学農学部)
- **第2号 (1998年11月)**
 JICA派遣専門家の殉職に思う
 玉井 理 (宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長)
 宮崎県JICA派遣専門家連絡会会報第2号によせて
 中垣長睦 (国際協力事業団九州国際センター所長)
 会員の現場報告シリーズ2 ホンジュラス国と水資源
 秋吉康弘 (宮崎大学農学部)
- **第3号 (2000年3月)**
 青年海外協力隊OB会との連携
 玉井 理 (宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長)
 会員の現地報告シリーズ3 ケニア農耕文化を訪ねて
 小川喜八郎 (宮崎大学農学部)
- **第4号 (2001年4月)**
 20世紀最後の年
 玉井 理 (宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長)
 国際協力の地方展開と経験の継承
 伊坂 潔 (国際協力事業団九州国際センター所長)
 会員の現地保国シリーズ4 アルゼンチンに想う
 原田 宏 (宮崎大学農学部)
 口蹄疫病にちなんで
 吉山武敏 (会員)
 ある難病患者の国際会議
 玉井 理 (宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長)
 こんばんは、ハノイのさえきです。みなさんげんきですか。
 佐伯雄一 (宮崎大学農学部)
- **第5号 (2003年3月)**
 帰国専門家中央連絡会に出席して
 玉井 理 (宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長)
- 宮崎県JICA派遣専門家連絡会の皆様へ
 山口三郎 (国際協力事業団九州国際センター所長)
 会員の現地報告シリーズ5 田園の香りがする埃レストランのヴェトナム
 山口良二 (宮崎大学農学部)
- **第6号 (2004年3月)**
 独立行政法人国際協力機構の発足にあたり
 玉井 理 (宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長)
 宮崎県JICA派遣専門家連絡会の10周年に寄せて
 山口三郎 (国際協力事業団九州国際センター所長)
 ハノイ農業大学強化プロジェクト雑感
 佐伯雄一 (宮崎大学農学部)
 ブラジル遥かなり
 南嶋洋一 (会員)
 私の国際交流
 吉山武敏 (会員)
- **第7号 (2005年3月)**
 宮崎県JICA派遣専門家連絡会の役割
 永田雅輝 (宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長)
 着任のご挨拶
 笠原秀昭 (国際協力機構九州国際センター所長)
 「JICA青年招へい事業」における宮崎県の受入れ
 岩元巖男 (ユースワーカー能力開発 宮崎県支部長)
 雑感
 吉山武敏 (会員)
- **第8号 (2006年2月)**
 宮崎県JICA派遣専門家連絡会と宮崎大学との連携
 永田雅輝 (宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長)
 九州国際センターでの2年目を迎えて
 笠原秀昭 (国際協力機構九州国際センター所長)
 黒龍江省乳業酪農計画について
 川原隆二 (前 家畜改良センター宮崎牧場)
- **第9号 (2007年2月)**
 宮崎県JICA派遣専門家連絡会に期待したいこと
 永田雅輝 (宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長)
 JICAプロジェクト ベトナム食品工業研究所強化計画に参加して
 小川喜八郎 (南九州大学健康栄養学部)
 ブラジルでの経験を活かして国際協力推進員へ
 佐藤愛美 (JICAデスク宮崎 国際推進員)
- **第10号 (2008年3月)**
 宮崎県の国際化推進における専門家連絡会の役割

- 永田雅輝（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長）
スリランカにおける野球選手としての2年間
後田剛史郎（宮崎大学農学部）
宮崎大学における国際協力の取組みについて
甲斐榮一（宮崎大学農学部国際連携センター）
- 第11号（2009年3月）
会長就任5年目を迎えて
永田雅輝（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長）
着任挨拶
小林正博（国際協力機構九州国際センター所長）
アフリカより遠い宮崎の地にて
岩田拓夫（宮崎大学教育文化学部）
 - 第12号（2010年3月）
JKUATプロジェクトは不滅なり
永田雅輝（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長）
JICA九州設立20年 ～地域リソースとの更なる
連携～
小林正博（国際協力機構九州国際センター所長）
宮崎で夢見る農業
佐々木正吾（しょうご農園）
事務局からの報告 公開講演会「国際協力という
仕事－JICAと国連の経験から」
柳沢香枝（JICA）
「JICA九州20周年の夕べ」
 - 第13号（2011年3月）
口蹄疫－国際的視野から考える－
永田雅輝（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長）
就任のご挨拶
村岡敬一（国際協力機構九州国際センター所長）
青年海外協力隊を経験した国際協力推進員
中西真伊子（JICAデスク宮崎 国際協力推進員）
- 【公開講演会】**
大学と連携した技術協力の紹介
永友紀章（独立行政法人国際協力機構）
口蹄疫を経験した宮崎大学が今後果たす役割
三澤尚明（宮崎大学農学部）
- 第14号（2012年3月）
国際協力・国際交流のネットワーク作り
永田雅輝（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長）
国際協力における自立的な発展～自身の経験から
振り返り考えたこと～
吉成安恵（宮崎大学国際連携センター）
 - 国際協力の原点は故郷宮崎に在り
末森 満（JICAシニア課題アドバイザー）
トルコ国カレイ養殖プロジェクトに参加して
酒井正博（宮崎大学農学部）
宮崎から世界へ・国際協力展2011
崎田佳予子（JICAデスク宮崎 国際協力推進員）
 - 第15号（2013年3月）
JICA教育協力プロジェクトの偉業に思う
永田雅輝（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長）
2012年「口蹄疫防疫対策専門家育成」
三澤尚明（宮崎大学農学部）
宮崎から世界へ！GLOBALINK
崎田佳予子（JICAデスク宮崎 国際協力推進員）
 - 第16号（2014年3月）
宮崎県JICA派遣専門家連絡会の今後
位田晴久（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長）
国際協力は日本も元気にする
勝田幸秀（国際協力機構九州国際センター所長）
アフリカの大地に魅せられて！！
小野陸一
（宮崎県青年海外協力隊を支援する会会長）
マーシャル諸島での協力隊活動と帰国後
岩切康二（宮崎県海外協力協会会長）
アルゼンチンでの国際協力に携わって
乗峯潤三（宮崎大学農学部）
宮崎大学での勤務を振り返り、思うこと
吉成安恵（宮崎大学国際連携センター）
宮崎から世界へ！GLOBALINK
崎田佳予子（JICAデスク宮崎 国際協力推進員）
 - 第17号（2015年3月）
宮崎県JICA派遣専門家連絡会の使命
位田晴久（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長）
国際専門家としての活動の軌跡
江藤誠一（ビューローベリタス）
オール宮崎、チーム宮崎で世界へ！
萩野次信（教育情報サービス）
宮崎から世界へ！GLOBALINK -世界とつながっ
ている私達2015-
北園さつ紀（JICAデスク宮崎 国際協力推進員）
 - 第18号（2016年3月）
宮崎県における国際交流
位田晴久（宮崎県JICA派遣専門家連絡会会長）

～2016年「連携」の年～

井崎 宏(国際協力機構九州国際センター所長)
JICA専門家の経験と宮崎でのグローバル化

鹿野正雄(宮崎大学国際連携センター)
出合いから始まった海外活動

日高健夫(JICA青年海外協力隊進路相談カウンセラー・宮崎県青年海外協力隊を支援する会事務局長)

(3) パネル展示会の開催

広報活動としてJICA, 大学との共催によるパネル展を開催してきました。例えば、平成7年11月の宮交シティアポロの泉広場における国際協力写真パネル展、平成9年1月、同年11月にはJR宮崎駅中央コンコースにおいて国際協力写真パネル展を開催しました。平成18年2月には宮崎大学附属図書館において国際協力の推進に関する写真、会員の現地活動写真を展示し、また国際協力に関連する図書を展示して学生諸君らにJICA活動への理解の啓蒙に努めました。最近では、青年海外協力隊OB/OG会や青年海外協力隊を支援する会との合同による展示会を開催し、広く県民へ国際協力の重要性をPRしています。

(4) 宮崎大学との連携・協力の開始

本連絡会には宮崎大学教員の会員が多数います。そのため宮崎大学では、大学の国際化を推進するに当たり、開発途上国等に対する国際協力を主要な柱と位置づけ、JICAとの連携強化を目指して平成17年12月にJICAとのコンサルタント契約を結びました。このことは将来の国際協力を担う人材育成の計画において、大学が実施する講義や国際協力活動に本会が協力できる可能性が生まれることとなります。

平成17年度はその実現に向けて、大学と本会との共催で宮崎大学国際化特別講演会と銘打って「宮崎大学のさらなる国際化推進に向けて－国際協力機構(JICA)等との連携強化－」を企画し、JICAから宮崎県出身の人間開発部長(当時、その後は上級審議役、シニア課題アドバイザーを経て、現在は国際ジャーナル責任者)末森満氏を講師に招き特別講演会を企画しました。講演会は平成18年2月に実施し、末森満部長には「国際協力と大学連携」と題して話をして頂きました。この講演会によって、宮崎

大学がどのような形で国際協力を推進できるか、将来の国際協力を担う人材の育成の考え方など、多様な国際協力の現状を学ぶことが出来ました。

このようにJICAに関する行事が大学とJICAが連携して開催出来たことは、本会の仲介の試みとしては大成功と言え、本会にとっては大きな成果で、今後の活動における重要な布石を作ることが出来ました。この活動は、平成19年度のJICA九州国際センター資料(JICA派遣専門家連絡会説明会)に「期待される活動内容の事例紹介」として取り上げられました。

これ以降、宮崎大学ではJICA関係の事業案件が増え、大きな成果となりました。その実施例を紹介しますと、平成18年度は、国際連携センター内に「国際協力プラザコーナー」の設置(4月)、JICA日系留学生1名の受入れ(4月)、JICA日系研修事業にかかる研修員受入れの開始(10月)、地下水ヒ素汚染による健康被害とその対策に関する国際シンポジウムの開催(11月)、平成19年度はJICA地域別研修「中東地域 女性の健康支援を含む母子保健方策」の開始(6月)、平成20年度は、JICA草の根技術協力事業「インドUP州における地下水ヒ素汚染の総合対策」の開始(6月)などがあります。平成21年2月には、JICAアフリカ部審議役柳沢香枝氏を招いて、宮崎大学国際連携センターと共催で同大附属図書館にて公開講演会「国際協力という仕事－JICAと国連の経験から」を開催しました。同年11月には、大学のキャンパスニュースにJICA九州20周年記念式典において永田雅輝会長が感謝状を授与されたことが掲載されました。また、平成22年4月の口蹄疫発生に関しては、その防疫対策として、平成23年10月に宮崎大学では学内共同研究施設として産業動物防疫リサーチセンターが開設され、平成24年9月には口蹄疫防疫対策上級専門家育成研修コースがJICAプロジェクトして開始されました。このように、JICA九州国際センター及び本会と宮崎大学との連携は密になってきています。

3. 宮崎県JICA派遣専門家連絡会の役割と今後の課題

JICAのHPから専門家連絡会の活動と役割を要約すると、JICA国内機関や青年海外協力隊OB/OG

会、各都道府県の国際交流協会等と連携して国際協力に関する理解と促進の活動、帰国専門家間の交流、JICA事業への支援等が掲げられています。JICAは、そのような専門家連絡会の活動に対して、地域におけるイベント・シンポジウム等の共催や後援、活動経費の補助、情報提供、活動全般の後方支援等を行うとなっています。

そこで、本会はJICA派遣専門家連絡会の本道を忘れずに、技術協力の担い手として、国際協力の理解者として、ODA現場の体験者として、地域における国際協力・交流の促進に貢献できるように取り組まねばなりません。幸い宮崎大学とJICAとの連携・協力が濃密になっていること、また宮崎大学所

属の会員が多いことなどの理由から、本会と大学とが協力して国際活動支援体制を一層強化して行くことが今後の課題と考えます。

数年前、JASSO事業で元留学生の教え子が勤務するネパール・カトマンズ大学を訪れた際、JICAネパール事務所を訪ねました。当国ではJICA専門家の活動が重要であり、高く評価されていることを聞かされ、自身のケニアでの専門家時代の活動が脳裏に浮かび、年齢が許せば再度挑戦したい思いにかられました。

これからも、宮崎県JICA派遣専門家連絡会の活動がより一層発展しますように祈念します。



「国際」「地域」を宮崎で！

宮崎大学地域資源創成学部

井上 果子

昨年2016年4月に宮崎大学の5つ目の学部として地域資源創成学部が新設されました。私は、同学部の専任講師として、「世界を視野に地域からはじめる」研究と教育に従事しております。この新設学部では、「実践・マネジメント力」「地域資源を理解し活用する力」を養うことを教育上の柱とし、ビジネス英語にも力を入れています。私のこれまでのキャリアは、まさに、「国際」「地域」「実践」の3つの要素から構成されています。その3つのキーワードと、「赤毛のアン」、「四国遍路」、「ベトナム」を関連づけながら、これまでの国際協力分野での経験と、その経験等を踏まえて宮崎で行う教育・研究との接点について、ご紹介させていただきます。

1. 「赤毛のアン」 — 世界を視野に

私は長崎県北松浦郡で生まれ育ち、海外との接点がない幼少期を過ごしました。ただ、小学生のころに学校の図書館で手に取った「赤毛のアン」のサクセスストーリーに純粋に感化され、田舎の女の子でも成功を可能とする「海外」の地に密に憧れていた

ことが海外での経験に続くきっかけとなりました。ワーキング・ホリデーという制度で10代最後に思い切って「赤毛のアン」の地、カナダへ初めての海外旅行（7か月の一人旅）に出ました。カナダ横断のバックパッカーとしての旅です。初めての海外での経験は刺激的で、その後、カナダ・モントリオールのマギル（McGill）大学商学部に入学することになりました。英語も内容もわからない講義を聞きながら涙で滲むノートに録音した講義内容を書き写してわかるまで踏ん張って勉強した日々が私の大学での一番の思い出になっています。イギリス・ケンブリッジ大学で経済学修士を取得し、留学を終えた1999年、深刻な就職氷河期のタイミングで帰国しました。そして、日系企業からは全く相手にしてもらえず、就職難の厳しさを経験し、外資系の会社での勤務を経て、紆余曲折の末、念願だった国際協力銀行（JBIC）に入行後、対中国、ベトナム、ラオス、カンボジアの円借款事業を担当することになりました。そして、しばらくして、国際協力分野のコンサルタントとなり、アジアを中心とする様々な国の国

際協力事業に多く携わるようになりました。宮崎大学に着任する2015年まで、東京と海外を行き来する日々でした。

2. 「四国遍路」— 地域からはじめよう

仕事で海外に長期滞在していた2007-2008年頃、一時帰国でまとまった休みをとることができ、約1,200kmの四国お遍路の旅に出ることにしました。ウォーキング感覚で軽くお遍路を思い立ったはずが、遍路道の途中、海外ばかりで見えていなかった日本の農村部の過疎化・少子高齢化がすすむ現実を目の当たりにし、農文化の豊かさに気づかされ、「農村部の持続的発展は可能か」という壮大な問いを抱くことになったのです。それをきっかけに、2009年、30代後半から（コンサルタント業を続けつつ）博士論文研究をベトナム紅河デルタ農村の内発的発展をテーマに行うこととなります。あるときは気候変動対策政策支援のJICA専門家としてベトナム環境省に派遣され、あるときは国際機関や環境省の仕事でアフリカや中東など世界各地に借りだされる仕事をこなしつつ、大学院生の姿になれば、フィールドワークでは、ベトナムの農家さんとともに田植えや稲刈りに勤しむ。ビジネススーツと農作業着を着替えつつ、日本と海外を忙しく飛び回る日々を過ごしていました。そして、2012年に博士（国際協力学）を取得するタイミングで、引き続き、実務家と研究者の二足の草鞋を履いた状態でベトナム農村部と向き合うこととなります。

3. 「ベトナム」— そして宮崎へ

博士論文の研究成果として確認できた研究対象地の「内発的発展」のメカニズムを踏まえ、（当時所属していた研究室が実施主体として行う）JICA草の根支援事業「PAMCI-SAFERICEプロジェクト」を企画し、2012年から2015年にかけて実施することとなります。無農薬・有機SRI（System of Rice Intensification）農法によるコメを農家集団が生産・販売する集落営農プロジェクトです。プロジェクト実施に際しては、私自身が総括者となり、ベトナム国家農業大学のスタッフや大学院生の後輩とともに、国際協力プロジェクトを実施する中で、マネジメント上の困難に度々直面しました。研究対象地の3つの

農村部の農業経営能力を向上させつつ地域の「内発的発展」を実現させる、その草の根における「社会実装」の取り組みは、理論どおりにならないことが多く、現場のリアリティを、実務家としての経験則をもとにマネジメントしていかなければなりませんでした。事業対象地の農家さんも大変な努力を重ね、試行錯誤の末、ベトナム農村部で初めての6次産業化が実現され、その成果が、例えば農業収入倍増といった目に見える形で現れるようになりました。事業が終了してしばらく経つ現在においてもプロジェクトの農村部の人々の手によって活動は続けられており、その取り組みは拡大しています。

上記プロジェクトの完了後、宮崎の地に参りました。宮崎大学地域資源創成学部には、毎年、90人程度の大学生が入学してきます。これからも続々と入学してくる学生が、広い視野をもち、地域に知的で実践力にあふれるエネルギーを注入し、今後の地域社会を形作る正のスパイラルを生み出す力になれるような教育に携わり、そして、変容を遂げる農村社会の今とこれからの見つめる研究を続けたいと思っています。昨年度は、入学したばかりの1年生15名がベトナム国家農業大学の学生15名とともにすべて英語でベトナムの農村振興から学ぶ海外研修プログラムを企画・実施しました。今年も同様の取り組みを続けます。さらにベトナムの大学生を宮崎に招聘し、ベトナムに進出している県内の農業法人等から学ぶプログラムも実施し、宮崎とベトナムの双方向の交流に発展させています。今年度は、カリキュラムの一環として海外短期研修に学生を送り出す事業が開始される予定で、COC+事業では「国際プロジェクトの企画と実践」を開講します。また、世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域に調査研究で入るようになり、神楽に代表される伝統文化の継承の面から農村部の変容をみる研究に携わるようになりました。世界農業遺産に認定された世界の地域が集う国際学会に地域の方々と一緒に参加する機会もある予定で、地域と連携した取り組みに関わることが多くなっています。

「世界を視野に地域からはじめる」研究、教育、地域連携等の取り組みについては、理念を共有する方々と有機的につながり、いかに効率的かつ戦略的に展開させることが可能か模索中にあります。その

ような中、宮崎県JICA派遣専門家連絡会総会に出席させていただき、宮崎県の国際化やJICA関係団体、国際交流・協力団体の関係者がたくさんいらっしゃることを知り心強く感じました。また、海外青年協力隊に応募したい学生や留学を希望する学生と



ベトナム農村を歩く宮大生とベトナム国家農大生

接する機会が多くなっています。

引き続き、世界を視野に地域で活躍する研究や教育に尽力したいと考えております。今後とも皆さま方のご指導・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



宮崎空港で研修を終えたベトナム国家農大生を見送る宮大生



私の国際協力活動

宮崎大学国際連携センター

矢野 靖典

1. きっかけ — バングラデシュ・ジョソール

私は、幼・少・中・高・大と学生時代を宮崎で過ごした生粋の宮崎人です。そんな私が海外での活動を行うようになったのは、大学時代にバングラデシュのヒ素汚染に出会ったのがきっかけです。当時、海外を見てみたいという漠然とした思いを持っていましたが、自ら行動するまでは至っていませんでした。そんな時に土木環境工学科の横田教授（当時）がバングラデシュのヒ素汚染について研究を行っており、同研究室では現地調査を定期的に行っていると知りました。ちょうど研究室配属が始まった時で、面白そうだなと思った私は軽い気持ちで横田研究室を選びました。

1998年5月の現地調査に初めて参加し、観光旅行ではない海外を経験しました。初めてのバングラデシュの農村での体験は、私にとって大変衝撃的なも

のでした。当時のことを思い出すと、まずは、とにかく暑かったという記憶です。日中は40度を超える暑さ、同じ研究室の友人はTシャツの形に汗疹ができたほどでした。言葉もよく通じない（英語はほとんど分かってもらえず、自分もベンガル語が話せなかった）現地の村の若者と、気合と根性、ほとんどジェスチャーでコミュニケーションをとりながら調査・サンプリングを行い、計画停電で電気もままならない宿舎で、ヘッドライトをつけて夜遅くまで分析を行いました。ビールは当然ですが（バングラはイスラム教徒の国なのでアルコールが手に入らない）冷えた飲み物すら手に入らない環境で、食事はすべてカレーのみ。心身共に限界ギリギリ、強烈な印象のほとんどはネガティブなもので『もう二度と行きたくない』と思ったものです。最初の調査は、現地の大変さと、日本のすばらしさを認識させられ

るものでした。

しかし、不思議なもので、大学に戻り気が付けばバングラデシュの話をしている自分がいました。村の生活、現地の人達がおかれている現状を知り、自分でも学んだことを現地のために活かすことが出来るのではないかと考えるようになりました。



学生時代の現地調査

そんなことを考えていた時に、アジアヒ素ネットワーク (AAN) というNGOが、JICA開発パートナーシップ事業をバングラデシュで開始することになり、現地スタッフとして参加することに決めました。AANで、現地の人達と共に活動する中で、総合的なヒ素汚染対策の重要性やそのノウハウを学ぶことが出来ました。約3年間滞在し、充実した時間を過ごしていたのですが、将来への不安や自分の技術不足など様々なことに悩み、一度、宮崎に戻ることを決めバングラデシュを後にしました。

2. 違う状況の中 — インド・バライチ

宮崎に帰り、全く別の分野の仕事をしていたのですが、横田教授から『宮崎大学がインドでJICA草の根技術協力事業を始めから、現地に行ってくれんね?』と誘っていただきました。2008年から宮崎大学が実施したインド・ウッタルプラデシュ州でのヒ素汚染対策事業です。バングラデシュから戻り4年ほど。のど元過ぎればなんとやら、行けば大変な

ことは重々わかっているのですが…。またやってみたくなくなってしまいました。しかも今回は現地に行くのは私だけ。日本人1人です。事業の現地統括をしなくてはなりません。私にとっては結構なチャレンジでした。

一番大変だったのは食生活です。当時の私はバングラデシュで生活できたのだから、どこに行っても大丈夫だとの思いがあったのですが、インドの片田舎は想像を超えるものでした。ヒンズー教徒の多いインドでは、ベジタリアンが多く私の食事もベジメニューで、ルティ（発酵していないナン）と白飯にカレー味の野菜とダル（豆）スープ。食事は毎回これのみで、近くにレストランもありません。乾季の終わりは40度を超える暑さなのに、冬はしっかり寒く、暖房施設が全くなかったため、事務所内に七輪を入れて炭を燃やして暖をとったほどです。密閉性が高ければ一酸化中毒になるところですが、そこはインドなので隙間風がどこからでも入ってきます。



スタッフにヒ素測定方法を指導中

事業規模も小さく、カウンターパートも小さな現地NGOだったので、現地でスタッフを雇用し、一から指導していきました。地方政府との交渉や現地住民との話し合い。一つ一つの活動を、少ないスタッフでどう行えば効率的で経済的か話し合いながら実施しました。

インドでは約5年、JICA草の根技術協力事業を2期行いました。一見同じようなヒ素汚染対策事業ではありますが、それぞれの事業でアプローチ方法の違いや、地理的条件、国民性の違いがあり一筋縄ではいきませんでした。ですが、真剣に真摯に向き合えば周りの人は話を聞いてくれますし、理解して

もらえます。インドでも、多くの人に助けられ、多くの事を学びました。

3. 現在 — ミャンマー・タバン

インドから戻り、ミャンマーでヒ素汚染対策事業が出来ないかと、ミャンマー保健省・医学研究局から要請を受け、2013年から案件形成を開始しました。ミャンマーが改革開放を始めた時期でもあり、契約書の問題やいくつかのハードルがありましたが、2015年8月から事業を開始することが出来ました。

ミャンマー事業の活動地は、最もヒ素汚染が深刻だと報告されているエーヤワディー州のタバンを選びました。この場所を選んだ理由は、汚染の問題があることは当然ですが、カウンターパートの意向が大きく、彼ら曰く「この地域は、地方のアクセスの悪い場所にあるため、行政の対策や海外援助が行き届いていない。住民は困っているので、是非この場所を事業地にしてほしい」とのことでした。事業開始前に行った村の代表者とのミーティングでは、住民

のやる気が高く、インドで住民の当事者意識の低さに悩んだ経験から、この場所を選ぶことにしました。しかし、アクセスの悪い場所で事業を行うのは思っていた以上に大変です。事業地に行くのにボートに使わなくてはいけない（川に橋が架かっていないので、車で行くことが出来ない）ので、移動に時間がかかってしまいます。また雨季の間は洪水で村が完全に冠水してしまい、事業どころではない始末です。これは事業開始前にも聞いていましたが、話で聞くのと体験するのとではやはり違います。高床式の家が床上浸水するというのは驚きです。

現在、事業が始まり1年以上たちました。健診活動や浄水施設の設置など、活動は進んでいます。ミャンマーという初めての国で、わからないことや戸惑うことが多いですが、カウンターパートと一緒に試行錯誤しながら日々活動しています。

これからも、現地の人達のために、現地の人達と一緒に、楽しみながら活動を続けていきたいと思えます。

編集後記

JICAエキスパートみやざき第19と第20号の合冊20周年記念号としてお届けさせていただきます。元会長の玉井先生、永田先生には特別寄稿をいただき、また、宮崎大学地域資源創成学部の井上先生、国際連携センターの矢野先生には、ご多忙の中、前回講演内容をベースに執筆いただきました。20周年を記に、連絡会も今年度から宮崎県青年海外協力隊を支援する会、宮崎県海外協力協会との合同総会として新たな取組みを進めます。県民の皆様に広く活動を知っていただき、国際協力の展開、支援を進めていきたいものです。本連絡会の活動について皆様方のご提案、忌憚のないご意見をお寄せください。ご連絡は下記までお願い致します。

会長 山口良二 (a0d402u@cc.miyazaki-u.ac.jp)
 幹事 大野和朗 (ohnok@cc.miyazaki-u.ac.jp)
 佐伯雄一 (yt-saeki@cc.miyazaki-u.ac.jp)
 鹿野正雄 (Shikano.Masao@cc.miyazaki-u.ac.jp)
 野中成晃 (nnonaka@cc.miyazaki-u.ac.jp)

事務局：〒889-2192宮崎市学園木花台西1-1 宮崎大学農学部内